

オランダ語講座のこと

— 専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年 —

荒野泰典

1

二〇一二年の三月末日で、私の非常勤時代を入れて二七年間の立教大学での勤めが終わった。それにともなつて、一九九二年頃からすこしずつ形を変えながら続けてきたオランダ語の授業（仲間内ではオランダ語ゼミ、略して蘭ゼミ）以下この略称を使用）初級も終わった。しかし長年続けてきた関係で、それぞれの研究のためにさらなるオランダ語の習熟が必要な人たち、その他様々な理由からこの授業を必要としている人たちもあり、今年度は弘末雅士さん（史学科教授、東南アジア史、以下、敬称は基本的に「さん」を使用）の研究室をお借りして、ヴォランティアの形で中級だけは続けている。来年度は一応正規の授業として初級だけは開講されるものの、それも一年かぎりです。再来年度以降は閉鎖される。最近はそのころ潮時かなと思わされるようなケースも増えてきており、担当者の私が定年退職するのを期にこの講座が廃止されるのも妥当な気がする。この面での自分の役割はそれなりに果たした、という気持ちも私にはある。後はどなたか、私がそうだったように、その志のある人にどこかで引き継いでもらえればありがたいと思うばかりだ。

オランダ語講座のこと — 専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年 —（荒野）

しかしそれはそれとして、始めた当初は私自身もこんなに長く続くとは思っていなかった、というよりも、先のことはあまり考えないままに始めて、思いがけず二〇年余りも続くことになった蘭ゼミについて、その概略なりとも記録しておくことは無駄ではないだろう。

2

現在蘭ゼミは、正規の授業としては「専門基礎」という名目で半期科目とされている。しかしそれは数年前のカリキュラム改訂によってそうなったもので、それ以前は「専門基礎言語」というカテゴリーの通年科目で、前期に初級文法、後期に簡単な文章を読むことにしていた。蘭ゼミではこれを初級と称する。そして、これはカリキュラムとしては登録されていない（つまり、単位にはならない）のだが、中級と称するオランダ語で書かれた論文や著書などを読むクラスがあり、さらに、そのクラスのなかで月一回だけだが、上級と称して一七・八世紀の崩字くずじ — つまりオランダ語原史料 — を読む訓練のための授業を設けていた。中級の論文までは私でも対応できるが、崩字となると心もとないので、その分野の専門家加藤榮一さん（元東京大学史料編纂所特殊史料部教授、本来は「先生」と呼ぶべきだろうが、以前から「さん」と呼ばせてもらっている）にゲストスピーカーとして来ていただいていた。

中級はカリキュラムに登録されていないが、私のヴォランティアで何とかなる。しかし加藤さんにヴォランティアでというわけにはいかない。同僚諸氏に相談したところ、ゲストスピーカーという名案を出してもらったので、それで来ていただくことにした。こうして、立教大学に初級から上級までそろったオランダ語講座を置くことができた。首都圏では、日蘭学会の他に常設のオランダ語講座があるのは、

立教大学だけという状態だった。しかし日蘭学会の講座は、聞き・話す能力の養成を中心としているために、正確に読む能力がつかないとして、私の蘭ゼミに参加してきた研究者もいた。二〇年余り続けたおかげで、受講者数は初級だけでも二〇〇人は下らないだろう。中級も、中国・韓国の留学生も入れて合計すると三〇名はくだらないと思うが、このクラスからはオランダ語を使用する日本史・東南アジア史の研究者も出たし、オランダのライデン大学で博士号をとり、帰国して国立大学の教員になった人も二人いる。

それはそれとして、通常の近世日本史ゼミの他にあったもう一つのゼミ（蘭ゼミ）は、私にとっても、大学における「第三の場所 [The third place]」として、欠かせない場であり続けた。「第三の場所」というのは、社会人（あるいは、一般人）には、家庭と勤め先の他に、もう一つ、それらとは直接関係のない、趣味などのように自分を解放できる場が必要という考えから名づけられたもので、うる覚えだが、米国辺りで一時期提唱されたように記憶している。もともと、史学科の講義に組みこまれていたので、大学とまったく関係なしという訳にはいかなかったが。蘭ゼミは、ほとんど同時期に出席するようになった日蘭交渉史研究会とともに、私自身がオランダ語を忘れず、日欧関係史への興味を持続させる格好の場であり続けた。

日蘭交渉史研究会は、一九五二年に岩生成一先生（一九〇〇―八八）を会長とし、旧台北帝国大学・戦後の東京大学時代の同先生の知友・門下生、その他各種研究所の研究者八名によって結成された。その目的は、平戸・長崎のオランダ商館長日記（以下「蘭館日記」と略称）の解説・翻訳・研究のためで、直接には、その研究を持続するための財源確保の手段として、文部省科学研究費等を申請するために結

オランダ語講座のこと——専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年——（荒野）

成された。以後、この研究会は国内外から財政援助を受けながら続けられ、岩生先生没後は金井圓先生（一九二七—二〇〇二）が代表を務められた。上記九人の他に、一九五八年にオランダ留学から帰国した永積洋子先生が会員に加えられた。その後長く会員は補充されなままだったが、九一年から、横山伊徳・松井洋子両氏（ともに現在東京大学史料編纂所教授）と私の三名があらたに加えられた。金井先生没後、同会は永積洋子先生を中心に、松井・横山・私の他、若手の研究者——その中には「蘭ゼミ」出身者も多い——も加えて再出発し、現在に至る——ここ数年永積先生は体調を崩されてお休みで、松井さんが実質的な代表を務めている——。その成果は日蘭学会編『オランダ商館長日記』一—一〇（雄松堂出版、一九八九—一九九九年）として刊行された。しかしそれがカヴァーしているのは、一九世紀のはじめからシーボルトの来日まで（二八〇〇—二七年）であり、現在はその続編刊行のために、月例の研究会が続けられている。

ちなみに、同日記の六・二〇巻（一九九五・九九年）の編集（訳文のチェックと訳注、解説）は、金井先生のサポートを受けながら私が担当した。それらの作業をするうちに、日蘭関係の動向や境界地域としての長崎のあり方や通詞たちの生息、日蘭交流の裏表をはじめ様々な人間模様、市井の日々のできごと等に接する中で、長崎遊女（国際関係におけるジェンダー）・コレラの上陸・種痘の伝播等々の興味深いトピックスに出会うことができた。「蘭館日記」の魅力は、その内容の豊富さと同時に、日本側の史料とは違う視角から同時代の日本を見ているところにある。

3

同僚にも親しい研究者にも、私が勤務先で長くオランダ語を教えてきているということを知らない人

も多く、それを聞いて驚く人もすくなくない。ここで簡単に、私のオランダ語の経歴をふりかえっておこう。東大入学後私が、日本思想史のうち蘭学・洋学の研究を志すようになったことは、最終講義でも述べた。そのためにはオランダ語が必要だったので、本郷に進学後、当時東南アジア史講座の教授で、オランダ語の授業を担当しておられた永積昭先生（一九二九―八七年、以下昭先生）を訪ねた。昭先生は突然訪ねた私を温かく迎えてくださり、先生も当初は蘭学をめざしたものの、その分野に限界を感じて東南アジア史に転向されたことなどを話してくださった。それから私は、昭先生の授業に出るようになったが、つい先頃（二〇一二年の三月）まで同僚だった弘末さんも、一緒だったように記憶している。昭先生の授業では、先生のやわらかで流暢なオランダ語と、時折ゲストでやってきて、生のオランダ語を目の前で聴かせてくださるド・フリース Jan de Vries さん（当時日蘭学会理事）の美しいオランダ語の響きなどが記憶に残っている。

その年の秋からだったか、昭先生は米国に留学されることになり、その話を聞いて困って相談に行った弘末さんと私の顔を交互に見ながら、昭先生は、妻が中央大学で非常勤だがオランダ語を教えているので、そちらに行きますかと仰った。二人に否やはなく、後期の初めに中央大学に行き、昭先生の奥様に挨拶した。それが永積洋子先生（以下、洋子先生）で、先生は主人から聞いています、と聴講を許してくださいました。教壇に立って、照れ気味なのか、早口で授業を進められる先生の姿が記憶に残っている。また、発足間もない日蘭学会（一九七五―二〇一一年）の湯島事務所でオランダ語講座が始まり、私もそれに一年ほど参加した。私が大学院に進学しからのことだった。その講師が柔道修行のために来日していたヘッセリンク R.H. Hesselink さん（現米国北イリノイ大学教授）で、バイクでさっそうと事務

オランダ語講座のこと——専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年——（荒野）

所に乗りつけた彼の若々しい姿と、その巧みで解りやすい授業は、今でも記憶に新しい。冒頭からオランダ語中心で、止むを得ない場合にだけに英語がはさまれる授業だったが、不思議によく解った——膝を痛めて柔道を諦め、日本史研究を志して米国ハワイ大学で博士の学位をとって大学教授になったヘッセリンクさんに再会したのは約二〇年後のことだった。しかし、その頃は研究テーマも対外関係史そのものに替えて、そちらの方に多く時間をとられるようになり、いつの間にかオランダ語からは遠ざかっていった。

4

修士論文は対馬藩を素材に近世の日朝関係で書き、その年に史料編纂所に入所し、近世史料部に配属された。本務の史料集の編纂（細川家史料など）や史料調査、入所の年に田中健夫先生を中心に立ち上げた前近代対外関係史研究会（以下「対外史研」と略称）の幹事、教職員組合等の他に、歴史学研究会の大会での二度の報告（一九七八年・八三年）などで忙しく過ごすうちに、オランダ語のこともほとんど忘れてしまっていた。洋子先生から自宅に突然電話があったのは、そんな時だった。入所後六年ほどたった記憶があるので、一九八二年頃だったろう。洋子先生が文部省の科学研究費で、「蘭館日記」に記載されている唐船輸出入品のリストを、翻訳して一覧表にする作業を始めたのが一九八二年だった——『唐船輸出入品数量一覧——一六三七—一八三三年——』（創文社、一九八六年）はその成果——。先生はその作業のかたわら、その助手を務めていた鈴木康子さん（当時中央大学院生、現花園大学教授）にオランダ語を教えることにしたのだが、ついては、私もそれに参加しないか、昭先生から私が大変よくできたと

聞いたので、というのがその電話の趣旨だった。自分は今まで大変楽しく日蘭関係の研究をしてきたが、ふと振り返ってみたら、後に続く若手が育っていないことに気がついて愕然とした、後進を育てるためならできるだけだけのことをした、という先生の声が、今でも鮮明に蘇る。私は喜んで参加させてもらうことにした―残っている私の手帳には、八二年三月二〇日に最初の「オランダ語」の書き込みがある、以下、この勉強会を「永積学校」と呼ぶ―。

テキストは、まず、J.F. カイペル Kuiper の「一八世紀の日本と外国 Japan en de Buitenwereld in de achiende eeuw」(s-Gravenhage, 1921) 及びその後いくつかの史料や文献を読んだ後に「ファン・デル・シヘイス Van der Chijs (1831-1905) の「日本開国に向けてのオランダの努力」Neerland's streven tot openstelling van Japan voor den wereldhandel : uit officieele, grootendeels onuitgegeven bescheiden toegelecht, Amsterdam, Frederik Muller, 1867 (後に、小暮実徳氏訳で『日本開国論』の標題で、「新異国叢書」第三篇の一冊として二〇〇四年に刊行) を読んだ。勉強会は、ほぼ週に一回のペースで続けられ、錆びついていた私のオランダ語も、徐々に調子を取り戻していった。私の癖でもあるのだが、せつかくの先生の気持ちを生かすべく、対外史研のメンバーをはじめ脈のありそうな研究者には声をかけて、勧誘した。その中で積極的に参加してモノになったのが横山伊徳・松井洋子両氏だった―もともと、私はい九八六年には立教に転任したので、松井さんとはすれ違いだったような気もする―。

私が立教に転任することが決まったのは一九八四年の暮れのことだったが、史料編纂所での仕事との兼ね合いもあり、立教での授業(院ゼミと学部ゼミ、それに特講)を常勤並みにこなすことを条件に赴任を一年待ってもらった。そのため八五年度は二つの職場で通常の倍のノルマを抱えることになり、手帳

オランダ語講座のこと ― 専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年 ―（荒野）

も残っておらず記憶もあいまいなことが多いのだが、おそらく私が立教に転任する前後のことだったろう、私は洋子先生の様子がどことなくおかしいことに気づいた。まず、口数が極端に減り、笑いも消えて、全体に元気がない。私は、どこか体調が悪いのだろうかなどと考えながら、ご本人に確認はしなかった。先生は暗い表情ながらも何も言われず、淡々と授業を続けられ、私が立教に転任するまで、それは変わらなかった。

先生の様子が変わった理由を知ったのは、立教に転任してからだった。立教に転任した翌年、昭先生が癌で亡くなった。たしかオランダ（だったと記憶しているが、イギリスだったかもしれない）留学中に癌が発見され、帰国後の闘病の甲斐もなく、他界された。洋子先生の様子が激変した時と昭先生が倒れた時期は、ほぼ一致していた。昭先生の葬儀に参列し、洋子先生の様子を見ながら、私は先生が「永積学校」に誘ってくださった時の言葉を反芻した。やや通俗的でつきみなみな表現だが、その時私は先生から、「永積学校」という「バトン」を受け取ったのだろう。

5

私が立教で蘭ゼミを始めようと思い立った直接のきっかけは、思い出せない。しかし洋子先生のこと が常に意識の底にあることは自覚していた。履修要綱を調べてもらったところ、オランダ語が正式なカリキュラムになったのが一九九三年だった。しかしその一年前には、東南アジア史の森弘之さんと相談して、空き家になっているコマを借りる形で、オランダ語の授業を始めている。その三年前、一九八九年の秋に、一カ月近く東南アジアを回り、翌年夏にオランダを訪れた経験が生きてもいられない（そ

の時のオランダ経験の一部は「一人ひとりの卒業式」(『史苑』五一(二)、一九九一年)にまとめている)。それはともかく、最初の年におっかなびっくりでオランダ語講座の蓋を開けてみると、二〇名ほどの学生が集まり、盛況だった。集まってくる学生たちを見ながら、思わず森さんとにんまりしたことを想い出す。立教生の向学心に手ごたえを感じたと、思ったのもつかの間、なぜ彼らがこの授業をとったのかを聞いて、私たちの気持ちはたちまち萎えた。彼らの受講の動機は、単純に単位だったからだ。

しかしそれにもめげず、九二年にはオランダ語を正式の科目として立ち上げた。さらに、多様な言語に堪能な教員を抱える史学科の特色を生かすべく、専門基礎言語研究という分野、すなわち、それぞれの専門を生かすために必須の言語を取得できる分野として立ち上げたのは、九六年頃だったろうか。当初はオランダ語(森・荒野)とトルコ語(設楽國廣)だったが、徐々にスワヒリ語なども加わり、多様化してきているが、最近、それも専門基礎と看板が変えられて、もとの狙いはやや薄められている。

残念ながら、オランダ語の相方の森さんは九七年に定年を待たずに亡くなったが、後任の弘末さんは、かつてのオランダ語仲間でもあり、引き続きオランダ語講座を続けることができた。しかし弘末さんはインドネシア語も堪能なので、ほどなくインドネシア語担当となり、それから私がオランダ語の初級と中級の両方を担当し、ここ数年は、先に述べたように、中級のなかに上級コースも設けて、なんとか初級から上級までのコースを揃えることができた。正規のカリキュラムに載せるのは、初級のみにとどめざるをえなかった。しかし与えられた条件のもとで、それなりに頑張ったのではないかと、私なりに納得はしている。既述のように、中級からは、他大学からの院生が多いのだが、かなりの数のオランダ語を使う研究者が育ち、そのうちの日本史を研究する何人かは日蘭交渉史研究会の主要メンバーに

オランダ語講座のこと — 専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年 — （荒野）

もなっている。洋子先生から「立教はすごいですね!!」と言われたのが嬉しかった。そのほとんどが立教出身ではないことがすこしさびしいが、出身大学がどこであれ、蘭ゼミからそういう人たちが育っていることが何よりもありがたい。

私自身も、近世の国際関係史が専門というだけでなく、蘭ゼミが励みと追い風になり、九五年には家族で一年間オランダの大学町ライデンに滞在することができた。家族でのオランダ生活は、私だけだけでなく、妻をはじめ三人の子供たちにとっても大きな財産として、今も彼らのなかに息づいている。子供たちも、一番下の娘ですでに二〇代後半だが、彼らも二〇歳を越えた頃から自己形成におけるオランダ体験の大きさを自覚するようになったらしい。妻もオランダ社会に接して初めて、自分の感性や考え方がまっすぐに肯定されるという感覚を味わったと語っている。

私もライデン大学のインターナショナルセンターが主催するオランダ語コースの初級コースを受講し、それまで私に最も不足していた聴き、話すという力を、すこしは底上げすることができた。このコースは、全六週間で、一週間六日（五日だったかもしれない）・一日六時間という相当に厳しいもので、この間はほとんどオランダ語漬けの日々だった。惜しむらくは、私が五〇歳になる年だったので、何度か、もう二〇年、せめて一〇年早ければと思った。若いころは、何度か辞書を引くだけで覚えられたものが、この頃になると、覚えただけのものが定着しないばかりか、その分だけより多く忘れるような錯覚に陥るほどだった。それでも、最後の試験には何とか合格して、凶に揭げたような合格証明書を獲得することができた。私の先生はルネという名前の男性で、もともと音楽家（声楽、バリトン）志望だったが、その世界は競争が厳しいので、やむなく語学の教師になったという人物だった。彼とはよく音楽の話な

どを英語でした。試験の成績を受け取りに行つてドアをノックすると、勢いよく開けて、「合格だよ」*ben gestagt!*」と言つて、合格証と成績表を手渡してくれた。この時ばかりは彼は頑としてオランダ語ばかりで話した、当然と言えば当然なのだが。

6

ルネがなんの折だつたかに、自分が音楽家志望から語学の教師に方向転換する際に幸運だつたのは、自分に語学の才があつたことだと言ひ、さらに、語学は才能 *talent* であつて、知性 *intelligence* とは関係ないと明言した。けだし名言だが、彼の謙遜がすこしは入つてゐるかもしれない。それにしても、それはオランダでは言えるかもしれないが、日本ではたして通用するだろうか。おそらくは、日本の受験に偏した語学教育のせいだろうが、さほど難しくないレヴェルの欧米語―英語やオランダ語―に、意味不明の、珍妙な日本語訳をつける学生たちに出会う時には、そんな気分になる。そういう時は、まず、主語はどれ、述語は、動詞は、・・・などと訊ね、辞書を開かせて―もつとも、オランダ語初級だと、学生諸君はまず辞書は持つてゐないが、実はこれは日本語で行う近世日本史のゼミの場合に、辞書を引かせる時と同じだ―載つてゐる意味を全部読み上げさせ、そのうちで、文脈に会う意味はどれかを考えさせる、という手続きを踏ませることになる。そもそもすべての学力の基礎となる日本語力が不安な学生が、急速に増えていることに、私は強い危機感を抱かざるをえない。このような状況を話したら、あのルネは、なんと言うだろうか。若い、志の高い人に、バトンを渡していいものだろうか・・・いや、これから先は老婆心というものだろう。よろしく頼みます、と言つて、健闘を祈るしかないと腹をくくろう。

オランダ語講座のこと — 専門基礎言語と専門基礎（通称「蘭ゼミ」）の二〇年 —（荒野）

◆ゼミで翻訳を行った主なテキスト◆

Femme S. Gastra, *De geschiedenis van de VOC*, Walburg Pers, Zutphen, 2002.
 [フェム・S・ハーストラ著、東インド会社の歴史、ヴァルブルフ印刷、二〇〇二年]

*オランダ東インド会社の歴史・会社組織・長崎出島商館を含む各支店の紹介など、オランダ東インド会社研究の基本となる研究書。二〇〇三年には英語版が刊行された。日本語版の刊行はまたなく、本ゼミでの翻訳をもとに刊行準備中である。

Deltev van Heest, "Prenten uit Nederland voor het moreel kompas.", *TROUW*, 12e. Aug. 2008.

[デットレフ・ファン・ヘイスト著、道徳的指針のためにオランダから来た絵画たち、*TROUW* 二〇〇八年八月二二日]

*オランダの日刊新聞 *TROUW* に掲載されたコラム「de Verdieping」〔深層〕の記事。二〇〇〇年夏に日本各地を巡回した日本軍による蘭領インドの占領に関する展示をめぐる、日本人の反応についてのコラム。荒野先生へのインタビューも掲載。翻訳および解説は、荒野泰典「綱引きする「戦争責任」—オランダのある新聞記事をめぐる—」（【資料と通信】『史苑』六一巻一号〔二〇〇〇年一月〕）に掲載された。

Ton van Velzen, "Uitgevaren voor de Kamers : 700.000 mensen oversee", red. Jan Parmentier *Uitgevaren voor de Kamer Zeeland*, Walburg Pers, Zutphen, 2006.

[トン・ファン・フェルゼン著、カメルのもとでの出航：海外に出た七〇万の人びと、ヤン・パルメムティール編集、ゼーラント・カメルのもとでの出航、ヴァルブルフ印刷、二〇〇六年]

*オランダ東インド会社の船員給与簿を分析した研究論文。船員の出身地、昇格ルート、給与支給方法など、具体的に分析されている。

J. W. F. van Citters, *Dagregister van het Opperhoofd Van Citters, sedert aen 1e. November 1830, tot en met den 1e. Januarij 1831.*

[J. W. F. ファン・シッテルス著、商館長日記 一八三〇年一月一日より一八三一年一月一日まで]
 *長崎出島のオランダ商館長ファン・シッテルスによる商館長日記本文および附属文書の翻刻・翻訳を行う

た。原資料はオランダ国立文書館に所蔵されている。翻刻にあたっては、東京大学史料編纂所所蔵、海外マイクロ写真帳 7598 (5-54b) を底本としている。

John E. Wills jr, "De VOC en de Chinezen in Taiwan, China en Batavia in de 17de en 18de eeuw", red. M.A.P. Meilink-Roelofs, *De VOC in Azië*, Bussum, Unieboek, 1976

〔ジョン・E・ウィルズ氏著「一七世紀および一八世紀の中国・台湾・バタヴィアにおける東インド会社と中国人、M・A・P・メイリンク・ルーフス編、アジアにおける東インド会社、ブッサム印刷、一九七六年」〕

*一七世紀から一八世紀にかけて中国、台湾、バタヴィアでの東インド会社の展開とそこでの中国人との関係を社会構造や貿易実務などを通して明らかにした研究論文。仮訳を本誌に掲載。

(本学名誉教授)



Rijksuniversiteit Leiden

STICHTING INTERNATIONAL CENTRE

TESTIMONIUM

Leiden, september 1995

Namens de Begeleidingscommissie Taalcursussen Nederlands verklaren ondergetekenden dat de kennis van de Nederlandse taal van:

YASUNOR ARANO

is getoetst op het niveau: Beginners.

De kandidaat heeft de toets met goed gevolg afgelegd.

Namens de Stichting International
Centre:

Prof. dr D.H.A. Kolff
(Voorzitter I.C. Bestuur)

Namens de Begeleidingscommissie
Taalcursussen Nederlands van de
Rijksuniversiteit Leiden:

H.E. Korenromp
(Admissions Officer)

Het niveau van Beginners wordt geacht te zijn bereikt na 120 uur taalonderwijs, dat van
Gevorderden I na 240 uur en dat van Gevorderden II na 360 uur.

Rijks **U**niversiteit **L**eiden

図 オランダ語初級合格証